

① 出題の意図

本問は、生成 AI をはじめとするデジタル技術の飛躍的な進展が、企業の経理・会計実務にもたらす影響と、それに伴う「会計専門職の存在意義の再定義」をテーマとしている。

仕訳の自動化や決算処理の効率化が進む中、これからの会計専門職は、単に数値を集計・処理するだけの存在では立ち行かない。テクノロジーを高度なツールとして使いこなしながらも、AI には代替できない人間ならではの付加価値を提供し、ステークホルダーからの信頼を担保する役割がこれまで以上に求められている。この問いに対して、会計専門職を目指す者が、技術革新の影響を多角的な視野で捉え、自らのキャリアを将来に向かってどのように築いていくのかという当事者意識をどの程度有しているかを問うたものとなる。

出題の狙いは、主に以下の 3 点を確認することにある。

(1) 技術革新と専門職の役割の結合

AI による定型業務の代替という環境変化が、会計専門職の業務内容にどのようなインパクトを与えるかを正しく理解し、これからの時代に求められるスキル (IT リテラシー、高度な分析・助言能力など) や倫理観 (職業的懐疑心、情報ガバナンスへの意識など) を具体的にイメージできているかを測る。

(2) テクノロジーの限界と人間の責任の理解

AI は膨大なデータを高速で処理できる一方で、その推論過程はブラックボックス化しやすく、また道徳的判断や法的な責任能力を持たない。この前提に立ち、AI が生成した財務データに対して人間が最終的に責任を持つことの社会的意義 (説明責任の完遂、プロフェッショナル・ジャッジメントによる信頼性の付与) を深く考察できているかを問うている。

(3) 論理的構成力と説得力

限られた時間と制約の中で、(1)と(2)の設問に対する自身の主張を明確にし、説得力のある論理を展開できる文章力は、実務において経営陣や監査人など多様な関係者に説明を行う上で不可欠な資質である。

以上の点から、本問は単なる IT 知識や会計知識の有無を問うものではなく、将来の高度専門職業人としての素養である「思考の深さ」と「視野の広さ」を測ることを目的としている。

② 評価のポイント

採点においては、形式的な要件の充足に加え、論理性、具体性、そして次世代の会計専門職志望者としての視点の持ち方を中心に評価を行う。具体的には以下の点を重視する。

(1) 論理的整合性と構成力（基本点）

まず、設問(1)および(2)のそれぞれに対して正面から答えているかを確認する。その上で、論理の飛躍がなく、(1)で論じた能力と(2)で論じる責任の所在が矛盾なく結びついているか、また、日本語としての表現が正確であり、文章として適切な形式が守られていることが前提となる。

(2) 求められる能力の本質的理解（理解度）

設問(1)において、単なる「AI を使えるスキル」といった表層的な記述にとどまらず、文脈の中で深く考察できているかを評価する。

例えば、スキル面では「浮いたリソースを活用した経営課題への助言」、倫理面では「AI の出力結果を盲信しない職業的懐疑心」や「機密データの取り扱いにおける高い倫理観」など、会計専門職の根幹に関わる要素を捉えられているかを重要視する。

(3) 責任と信頼の多面的な考察（応用点）

設問(2)において、会計が果たすべき社会的役割と結びつけた考察ができている場合に、高く評価する。

例えば、「資本市場が求めているのはAI の計算結果ではなく、専門家が検証・保証した信頼できる情報である」という視点や、「不確実性を伴う会計上の見積り等において、企業の個別事情を勘案した総合的な専門的判断は人間にしかできず、そこに責任が伴う」といった多面的な論述が行われている場合には、高い評価を与える。

(4) 独自性と具体性（発展点）

一般的・抽象的な「AI と人間の共存」といったあるべき論に終始せず、具体的なイメージを喚起させる内容であるかを評価する。理想論だけでなく、AI がもたらすハルシネーションのリスクや責任の所在が曖昧になることの危険性など、実務上の障壁にも目配りがなされているか、あるいは自身の見地に基づいた独自の視点が盛り込まれているかという点も評価の対象となる。